

## 「感受性と社会問題について」

1D0406019 松尾和美

### ■ テーマ ■

(はじめに)

最近、変な事件が多い。少し前まで受け入れ難かった“非現実的”な事件が日常的にテレビで流されている。何か変ではないか？ 皆さんはどう思いますか？ 私は今回のレポートを通して、変容しつつある現代人の感受性のバランスを考えてみました。そしてそこに密接な関係があるメディアの在り方についても考えてみました。このレポート作成の試みは“自分の感受性”を探ると共に、平行して“社会問題”という広いテーマにまで言及しています。“ある番組”を取り上げ、そこを切り口として現代人の“心の反応と感受性”について考え、書いています。

そしてこれらの見解を“現実的”“非現実的”という2つの視点で、深究しているため、このレポートの中ではこの2つの表現がとても沢山出てきます。

---

少し前から注目しているテレビ番組がある。「オーラの泉」という番組である。この番組はマルチ役者、美輪明宏さん、スピリチュアルカウンセラーなる江原敬之さん、ナビゲーターの国分太一さんという構成から成る“スピリチュアル・トークショー”というコンセプトを持った番組である。この番組は毎回各界の著名人をゲストに向え、その人の気質を表す“オーラ”を教え、前世を語り、現在の状況を良くするべく様々なアドバイスやコメントをしていくと言う番組である。

当初、私はこの番組に対し、漠然と興味を持ち、そして自分の周りに意外と多くの視聴者がいる事にも気が付いていった（それらの人々はあくまで仕事場の人間、友人という程度である）。この話題になると、たいがいの知人がこの番組を知っており、そして興味深く見ている事を知った事でよりこの番組に対しての興味が強まったかもしれない。

世間一般の目線で捉えると、この手の番組（非現実的なテーマの番組）に対

する意見はたいがい賛否両論に別れるものだ。全く興味がない人、最初から信じない人、または否定的な角度で捉える人、といった具合に。しかしながら、なぜかこの番組を鋭く切り込む人は私の周りには居なかったのだ。これは少しだけ不思議な現象だと思った。

近年、自分も含め、日本人の中では、社会的変化という要素も含めて、なんらかの意識改造が行われているのだろうか。意識や感受性は変化し、違う土壌が出来て着て来ているのだろうか。言い方を変えれば、少し前では特別視されかねないような事象でも、違和感なく受け入れられるようになっているかのように見える。受け入れない派も特にそれに反発するでもなく、反応せず見過ごすというスタンスでそれらを許しているのかもしれない。そしてこの変化は“ポジティブ”な方向と“ネガティブ”な方向の両方に起きているのかもしれないと感じている。

そして、それが顕著に見られるのは、メディア（テレビを中心とした情報発信元）の在り方と社会全体で日々起こるニュースに対する我々の反応にも顕著に見受けられると私は思っている。

話は「オーラの泉」から少しずれるのだが、このような事象に対する反応は、最近の政治や戦争、核といった、我々の耳に届く、驚くような情報に対しても共通している。世の中が冷静かつ“ゆるく”物事を受容しているように見えるのだ。要するに、日本人の中で（あえて日本の中のみ絞ってみると）物事に対する受容形態や感受性が急激に変化し続けている結果ではないかと思われる。

私自身の感度も含め、これらは感性の受容範囲が広がったという“良い事”なのか、反対に過激なニュースの連発に慣れてしまい、感度が鈍感になった“悪い事”なのか—その点は色々と多角的な見解があると思う。しかし我々の目や耳に届く事象の振り幅がたとえ極端な程であっても、私は世の中全体がそれに驚く事が少なくなって来ている気がするのである。

話を「オーラの泉」に戻したいと思う。考えるととても不思議なテレビ番組なのである。（“不思議”の捉え方もまた人それぞれと言えるのだが）目に見えない“オーラ”や“前世”といった話に真剣に入り込む参加者や視聴者。そしてそれを見るブラウン管の外の私。これは本物なのか。それともエンターテインメントなのか。色々考え出すと、科学的根拠の無い事に対する議論が大槻教授（早稲田大学の名誉教授。物理学の教授であり、科学で証明出来ない超常現

象に対しメディアを通して反論し続けている)のように始まってしまいかもしれない。

ちなみに、私はこの番組は一種の“エンターテインメント”として、単純にそれを楽しむ事が出来る人間なのである。“非現実的な事”に対しての拒否反応も無く、番組自体に対しても社会的に害があると思っていない。むしろ朝から目にする物騒なTVニュースと比較すると、反対に平和な番組だと感じている程である。

なぜ“感受性”をテーマにしたかという“動機”であるが、それは“まえがき”に書いた通りである。重複した説明になるが、自分らしい目線で見、最近感じる不安定な“社会の感受性”と“自分の感受性”に対する見解を“非現実的”“現実的”という2つの視点で持って、深究してみようと思ったからである。

今回のレポート作成では“テーマ”に対し、対話する相手が必要でした。その相手をメンターの金相郁さんをお願いしました。なぜメンターの方をお願いしたかというと、私は社会人学生であり仕事の兼ね合いで時間的問題から、インタビュー形式での対話というものが難しかったからである。よって対話方法は全てメールでのやり取りに終始した。私の文章に対する金さんからの意見、質問があり、それに対し返信メールで答えるというスタイルで行いました。

(下記参照)

## ■対話■

対話に関しては全ての言葉に意味深いポイントがあったため、原型をなるべく崩さず残しました。以下、発言事に(金さん)、(私)という様に分け、金さんの対話文に青色をつけました。

### (金さん)

「オーラの泉」ですね。私はそんなにこの番組に興味は持っていなかったのですが、昨日、見ました！！確かに、松尾さんが書いているように、日々目にする現実問題と非現実的な問題には人が感じる「感性」というのは確かに違うと思います。しかし、私は今まで松尾さんのようにその感性がどのように自分の中で違うのか、そしてどのように処理するのかについてあまり考えたことがないですね・・・

(私)

ここで私が感じたのはやはり“現実と非現実の境界線”の感じ方や反応、習慣は潜在的な心理活動であり、通常意識する事でないのが一般的なのであると改めて思った。それだけに立ち止まって考える必要性を感じ、風化された思考を自分の中でより明確に出来ると感じました。

(金さん)

二つ（現実的、非現実的）は確かにだれが見ても違うことでしょう。そうするならば、「感性」というものも違ってくることは当たり前だと思います。だからといって、その二つは別世界の問題だとは、私は思いません。もちろん感性もそうです。たとえば、「殺害」の報道を見にした私は「なんてことなんだろう！くそっ！この世も変わってきてるね」とか何気なく否定的な感性で受け止めます。またそれがエスカレートしていくと私は自ら無意識的に自分をネガティブな人間にしてしまいます。そういったところで、「オーラの泉」のような番組や非現実を目にすれば、うまく言葉にできないですが「そうなんだ・・・これからどうやって自分は生きていけばいいんだろう」とか「殺害について俺はどうやって考えるのかな・・・」とか、いろいろ考えるようになります（この間かなり考え込むようになりました）。つまり、そう考えれば「感性」の形は違いますが、その二つの感性が糸でつながっていると現時点で私は考えています。境界線は私には感じられませんね・・・

(私)

現実的と非現実的な事の境界線についての話しでしたが、金さんの意見ではその境界線に対して、あまり感じられないと書いていました。実は私の中でもかなり違和感なく「現実性と非現実性」を受け入れていますので、実際どこから非現実的かーというのを見定めるのは実際難しいところです。

本来人間自体がかなり物質的な事以外の要素が思考を左右する生き物だと思っ  
ていますから（ある意味霊的な生物？）それは自然な事なのかもしれません。

私自身も日常生活の中において、自分の感性を信頼し、また、直観を信じているところがあり、それは根拠の無い感覚だったりしますが、様々な局面でそ

の直観を信じています。これは他の人達も同じでしょうし、個人差があると思います。しかしながら、今週の「オーラの泉」（ゲストは堀ちえみさんでした）を見て、こう感じました。この番組は現実の延長線上に非現実の世界があり、そこに（番組が言う）スピリチュアルメッセージが存在すると。目に見えない守護霊達？と会話をしながらも、それに対し違和感がないのは、現実社会の問題を内包させながらメッセージを説いているからかもしれない。そう思いました。

今回の「オーラの泉」ではここ数週間、テレビやニュースでも取沙汰されている「いじめ」の問題にも焦点をあて、ゲストの話に織りまぜながら、なぜ社会にいじめがあるのか、なぜ近年の子供社会が不安定になって来ているのか等を解説しながら、ゲストの質問に答えていました。

私はこの番組の人気の理由がここに集約されていると思いました。番組の宣伝や分析だけをするつもりはないのですが、「現実と非現実の境界線」を今回の番組内に見る事が出来たと思いました。

「いじめ」は現実の社会問題であり、教育者ですら解決に苦慮する根深い問題です。しかし、この番組の問題解決のアドバイスは政治的な解決案ではなく、人間本来が持つべきモラルに基づいたとてもシンプルなものでした。

たとえば、「まじめに生きなさい」—といったもの。近年の社会に叱咤すると言った内容で、それらの言葉が複雑でないほど、このスピリチュアルメッセージは現実的かつ神々しい言葉として重みをまし、視聴者の心に届くのだと思いました。

この番組の翌日、そして番組を見ている最中にも実際知人、同僚から「今、見てる？」「面白いね」といったメールが届き、改めて（現代人は）このような指針を必要としていて、なおかつ興味を持って見ているのだなと実感しました。金さんの対話文にも書いてあった通り、番組の中での一言一言が各々の人のこころに残り、生きていく自分にとっての力になるという点で私は同意しました。

そして“非現実性の境界線の受容”について考えた時、実際、人はあまりそれに敏感ではないと思っています。なぜなら、私達はメディアにゆっくりと、しかし確実に影響を受けその価値観や真実性に対して受け身になるあまり、改めてそれを分析して考える必要性など迫られていないからです。しかし、実際メ

ディアでは隣国で核の問題が現実問題として報道されている訳で、このような事象は現実として、より真実性をおびている深刻な問題であると思いますし、隣の県で起こる嫌な殺人事件も現実のものです。

しかしこの現実のものが意外と他人事となり、単なる情報トピックスとして処理され、自分の中は、「オーラの泉」のオーラの話や守護霊のメッセージがより身近に感じるというのも、不思議な事ではあります。こう感じているのは多分に私だけではないと思うのです。

私は自分の中にこのような“現実と非現実の境界線”の矛盾点を感じています。それゆえ “現実と非現実の境界線” に対する感じ方の矛盾を定義し、書いてみました。そして、なぜそこに矛盾が生じるのか、より深く考えて見る必要性を感じています。

#### (金さん)

現実と非現実の境界線に対する矛盾・・・それは、みんなとは言わないまでも、たぶん、大勢が意識的になれば、感じる事が出来ることなのではないかと考えられます。

今回は現実と非現実の境界線の感じ方に対する矛盾がなぜ生じるのかですね。私の見地では、その矛盾が生じるのは、(ちょっと漠然かもしれないですが) 結局は自分の問題として捉えているかどうかの問題だと思います。つまり、ある実体、ある現象に対して、自分はどう考えていくかといったことでしょう。

私たちは、日々ものすごい情報、メディアの渦の中で生きてるといっても過言ではないと思います。その中で取り扱われるのは、実際、個人から生まれてきたものにもかかわらず、大体は上に書いた実体、現象だけであり、無意識的に人はそれを吸収してしまいます。考えれば、メディアはそういうものかもしれない。しかし、ごく単純な解釈かもしれないのですが、「オーラの泉」はその問題の根底にある、個の諸問題に迫り、それを話題として取り上げていると私は考えています。

だから、松尾さんが非現実的なオーラの話や守護霊のメッセージが身近に感じるのはあたり前かもしれません。なぜならば、そのメッセージがもし他人に対するメッセージだとしても、それを自分の状況に置き換えるのが出来ると思うからです。オーラの泉も結局、このようなところを視聴者に訴えていると感じられます。なんか、こういった番組を見て自分の生き方や人生などを振り返

るようになるという感じでしょうか。松尾さんは、このような感覚を持ったことありませんか。

境界線に対する矛盾・・・それは結局、意識的に自分に引き付けて考えようとし  
ない、人間の思考の鈍さにあるのではないかと現時点で私は考えています。

(私)

“オーラの泉”を見て、金相郁さんの言うように、確かに私も自分の心の状況  
や身近な環境で起きている事、気になる事を重ね、うなずく事は少なくありま  
せん。これらは自分への日常的な行動に対する戒め、または勇気につながる良  
い事だと受け取っている傾向があると思っています。

そして、境界線の矛盾に関してですが、金さんが触れてくださった“矛盾が生  
じるのは、結局は自分の問題として捉えているかどうかの問題”“人間の思考の  
鈍さにあるのではないか”という点をもとに下記の様に考えてみました。

私が考えるに、昔の人（私が知るここ数十年の話ですが）は現代に起こる  
殺人やいじめ、社会問題に対し、もっと繊細に反応し、傷付いていたと思うの  
です。それにも関わらず、現代ではメディアの人間もそれらに慣れてしまい、  
問題を扱う専門科、評論家ですら、事件や核問題に対して危機迫るコメントを  
しているとは思えず、それらの事件や事象に対し、尊厳ある対応をしていない  
と感じられる事が多いと感じます。ワイドショーで流すニュース（例えば事件）  
の効果音や演出も、深刻そうに見せるその裏でとても軽薄なものを感じる時が  
あるのです。ですから私の考えは、社会全体が、とても鈍感になり、大人自体  
（全てとは思っていませんが）も時代とともに不謹慎になり、それが社会全体  
の雰囲気を作っている場合があると思います。結果的にあまりよくない風潮が  
一般的になっていると思う事があります。ですから、思考の鈍さはもともと鈍  
かったのではなく、鈍い方に変化したと感じています。

私自体が偉そうに言える程、真面目な人間とは思いませんが、最低限のモラル  
やバランスは保っているつもりですし、物事に鈍感にならぬよう、ある程度は  
気を配り生活しているつもりです。

>上記の金さんの意見で“矛盾が生じるのは、（ちょっと漠然かもしれないです  
が）結局は自分の問題として捉えているかどうかの問題だと思います”とあり  
ますが、例えば、子供をもつ親や地位のある人が、自分と同じ年令の子供（児

童)にいたずらをする、傷つける、強いては、最悪殺害する。といった事件は  
どうでしょうか。彼等は自分の家族や環境と、その被害児童の家族との環境や  
状況を置き換えて考える事ができないのでしょうか。もしそうだとすれば、そ  
こにも大きな問題や感性に対する矛盾がでてきます。最近教育を受けた大人  
の事件も増えていますので、その矛盾に歪みを感じます。

感情は機能していても想像力が欠如して、冷静に状況の置き換えができないの  
か、いずれにせよ、その感性に対しても、“オーラの泉”と“核問題”くらいの  
矛盾を感じてしまいます。

## ■結論■ (結論のポイントでは強調したい所に赤い色を付けました)

私は最近朝、テレビを長時間、見ない事にしてます。以前は起きたらテレ  
ビをつけて出かけるまでつけっぱなし、という生活をしていました。しかし、  
くりかえし流す同じニュースにうんざりし、自分の生活の始まりにあまり、い  
い感情を与えないと感じてからは、必要なニュースだけ(天気予報や時事問題)  
を把握したら後は消してしまいます。それ以上のニュースはインターネットで  
取得しています。対話を経てははっきりと分かった事は、私は人の情緒(感性)  
に影響を与えるメディアに対する報道にバランスの悪さを感じているという事  
です。これらはとても片寄ったもので、同じネガティブなニュースを1日中く  
り返し流しウンザリします。これでは人間の情緒に悪影響を及ぼしても仕方が  
ないと思っています。なぜ、もっと“幸せ”を感じるポジティブな事柄にもフ  
ォーカスしないのか。視聴者は事件や悲劇を好むからなのか?視聴率ありきで、  
暗いニュースにフォーカスせざるを得ないのか。そのへんは各自感じ、考え方  
は異なる点かもしれませんが、私自身は悲劇に群れる傾向の強い報道姿勢があ  
まり好きではないのだと思います。人間は元来影響を受けやすく環境や情報に  
共鳴しながら生活しているものです。そしてここまで情報化が進んでいる社会  
である事で私達は知らずにその影響を被っています。毎日“人が殺された”“そ  
の方法はこうだった”というニュースばかり聞いているとその“ネガティブな  
情報”に慣化される可能性があります。(最近、報道の在り方の酷さに対し自ら  
問題意識を持ち、苦言を呈しているキャスターもいました。)

また、“教師のわいせつ行為”“警官の不詳事”、“政治家の汚職”ばかり見せ  
られると、大人社会に対し、様々な人(子供達含め)疑心暗鬼になるでしょう。



戦争問題もメディアの取り上げ方一つでまるでフィクションのようにも見えてしまいます。そうすると隣で起きている大事件も他人事のように感じ、まるでドラマを見ているような感覚で鈍感になってしまうのではないのでしょうか。

社会の情報の発信の在り方としてはそれこそバランスが大事であると思います。説明表現が非常に難しいのですが“ネガティブ報道”だけでも“ポジティブ報道”だけでもいけないのです。知る事にも**バランスが大事**なのです。

正常な感性（感受性）もバランスが保たれて初めてそのセンスが養われるのだと思うのです。そして誤解が無い様に触れたいと思うのですが、ポジティブ報道と言うのは、夜のゴールデンタイムに放送する“お笑い”や“バラエティー”ではありません（笑えるという点でそれもポジティブと言えますが）ここでいうポジティブさは、“人の心”の感受性を健全に導く内容のものです。**メディアの作り手はその報道の在り方と影響を考え、道徳的センスのもとでバランスの良いものを作る意識へと変わって行けば良いと思っています。**

日本には素晴らしい文化が沢山存在しています。視聴者は毎日何度も繰り返される“凄惨な事件報道”ばかりを欲している訳ではありません。私は世の中の“素晴らしい事象”も同じ様に沢山知りたいと思っています。格差社会、貧富の差、勝ち組、負け組、というネガティブなキーワードや差別意識に焦点をあてすぎる風潮も好きではありません。メディアがそれらのネガティブティを助長させる媒体になっていると思う事は少なくありません。そのせいで社会に必要な以上の“ネガティブ要素”が流れ込む事もあります。

私は日本のメディアがもっと成熟したのを作り、社会を健全な方角へと先導する手助けをすれば良いと思っています。**色んな事件が起こる“複雑で不安定な時代”だからこそ、“安心できる情報”も沢山伝えて欲しいと思っています。**

※下記の文章は対話の相手をして下さった、金さんの意見であり、私も同意している部分です。（青色部分）

（金さん）

「昨日番組を見ながら考えたのですが、その非現実的な番組や出来事を接することによって、現在自分を取り巻いている現実問題から抜け出したい、癒され

たいというような感性を無意識的に私は求めているのではないかと。(あくまでも私はそうだと思います) だから、番組の中で一言がずっと自分のこころの中に残ったり、またそれが明日を生きていく自分にとって、力になったりするのかもしれない。」

“オーラの泉”の番組としての注目度は、実は番組が放つ安心できるメッセージ(守護霊からの非現実的なメッセージだったりもするが)という“安心の需要度”の現れなのでしょう。

“オーラの泉”から始まった“小さな矛盾”を考える事で、私が考える矛盾には沢山の要素が絡み付いていると改めて思った。そして“人の心”や“社会という存在”が“環境問題”に似ているという事にも気付いたのだ。技術進歩や、資本社会のニーズを追い求める時は10年後の影響、結果も考えなければならない。世の中の利便性を追求するあまり、気がつくやうな大気圏に穴があき、最終的には大きな代償を払う。

そして人の心”も“森林や大気圏”と同じなのだ。時代が与える刺激やメディアの情報によって知らない内に心に穴が開く事があるかもしれない。または取り返しのつかないような殺伐とした心になるかもしれないのだ。

このようなあらゆる進化と破壊という矛盾が世の中のあらゆるところに存在する点を私達は考え、自分の環境レベルでもっとその問題を考えられたらいいなと思った。なぜなら、あらゆる痛み鈍感になる事は強いては自分の痛み鈍感になる事だと思ふからだ。その痛みを避ける為には、偏った情報に流されず、**バランスの良い柔軟性ある考え方と感受性を養う努力が必要**である  
----そう考えるに至ったのである。

---

(おわりに)

私が今回のレポート作成で感じた事、それは文章で“心”を伝える難しさではないだろうか。読み手にその内容は伝わっていると思う。しかし、わたしが“心”で感じるのと同じレベルで“それ”を伝える事はそう簡単な事ではないとこの活動を通して実感した。思った以上に回りくどい文章になったり、長々と書いてみたり、客観的に自分の書く行為の特徴を見る事ができた気がする。その点においては言語を考える上で、とても良い経験をしたと思う。この授業を通し、客観的に文章を評価する他人の視点があればここまで書けなかった

かもしれない。書く事を通して、テーマについて考え、自分自身の考えに対しても学べた事は実に良い経験だと思っている。この活動を面白いと思えた事がこの活動が私に与えた影響であると思っている。